

Correlation between CXCR4/CXCR7/CXCL12 chemokine axis expression and prognosis in lymph-node-positive lung cancer patients

桂, 正和

<https://doi.org/10.15017/1931788>

出版情報：九州大学, 2017, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：

権利関係：© 2017 The Authors. Cancer Science. This is an open access article under the terms
of the Creative Commons Attribution-NonCommercial License.



(別紙様式2)

氏 名	桂 正和				
論 文 名	Correlation between CXCR4/CXCR7/CXCL12 chemokine axis expression and prognosis in lymph-node-positive lung cancer patients				
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	中西	洋一
	副 査	九州大学	教授	岩城	徹
	副 査	九州大学	教授	中村	雅史

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

腫瘍細胞に高頻度に発現している受容体 CXCR4 及び CXCR7 とケモカイン CXCL12 は細胞遊走、ホーミング、血管新生を介して転移に関与している。肺癌では転移好発部位に CXCL12 が高発現していることが報告されているが、リンパ節転移におけるこれらの生物学的役割は解明されていない。

申請者らは、外科切除された原発性肺癌 140 例において、原発巣とその転移リンパ節における CXCR4、CXCR7、CXCL12 蛋白発現を免疫組織化学染色で評価し、これらの蛋白発現と臨床病理学的因子及び予後との関連性を解析した。

その結果、原発巣における CXCR4 および転移リンパ節における CXCL12 の高発現は予後不良と有意に相関すること、原発巣における CXCR4 高発現と転移リンパ節における CXCL12 高発現とに正の相関を認めること、原発巣 CXCR4 高発現かつ転移リンパ節 CXCL12 高発現症例群は有意に予後不良であることを示した。さらに、多変量解析にて転移リンパ節における CXCL12 の高発現は、独立した予後不良因子であること、また、転移リンパ節では間質細胞に比べ、腫瘍細胞においてより高頻度に CXCL12 発現が認められることを示した。

以上の結果より、申請者らは、CXCR4 / CXCL12 は、転移リンパ節における腫瘍増殖において重要な役割を担っており、リンパ節転移陽性非小細胞肺癌患者の予後不良と関連していると報告した。

以上の成績はこの方面の研究の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。